



2007年11月14日

株式会社三井住友銀行 頭取
奥 正之 様

社団法人 日本建築学会
関東支部長 片桐 正夫

旧日本相互銀行本店の保存に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましてはご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

貴社の所有する東京都中央区八重洲の「旧日本相互銀行本店」の建物について、現在、再開発計画の中で建て替えが検討されていると聞き及んでおります。

ご承知のように、この建物は1952年に竣工し、その年の日本建築学会賞を受賞した著名な建築作品です。設計者は日本近代の代表的建築家である前川國男（1905-1986）で、この旧日本相互銀行本店は、前川が戦後に最初に取り組んだ本格的な建築作品として知られています。建物は、地下2階・地上10階建てで、地下から地上2階までの部分を鉄筋コンクリート造とし、地上3階以上の部分を鉄骨造とした近代的なオフィスビルの先駆的作品です。前川は日本に本格的な近代建築を実現するため、さまざまな形で主導的な役割を果たしましたが、旧日本相互銀行本店の設計においては銀行本店を本格的な「近代的オフィスビル」として実現すべく、構造形式、施工方法、建築材料のすべてにおいて、当時としては最大限に近代化することを試みました。ここで試みられた「カーテンウォール工法」など多くの技術は現代のオフィスビル建築の基本的な技術として定着しており、よってこの建物は日本の近代的オフィスビルの原点とすることができます。また、この建物で試みられた手法は、戦後の前川作品を代表する多くの公共建築に発展・継承されており、戦後の前川作品の原点とすることもできます。

現在、東京駅周辺は土地の高度利用を目的とした再開発が進み、超高層ビルが林立する風景へと変貌しつつありますが、丸ノ内・八重洲地区が他の業務地区とは違う、日本近代のオフィス街の出発点であったという歴史的意義を失わないためには、戦前のオフィスビルの到達点である丸ノ内の東京中央郵便局と、戦後のオフィスビルの出発点である八重洲呉服橋の旧日本相互銀行本店は、現在、ともにかけがえのない文化的価値を担うまでに至っています。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値について改めてご理解いただき、建物の取り壊しを見直して頂くとともに、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に考慮した保存を行っていただけますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、できる限りのご協力をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具



ルでほぼ常識となっている多くの手法は、戦後の資材統制が解除されて間もない時期に、前川たちが旧日本相互銀行本店においてほとんど手探りで取り組み、開発したものである。そこで取り組まれた具体的手法のうち、主なものを以下に示す。

■上層部の躯体の軽量化

・ 鉄骨の全溶接と柱・梁接合部の工場加工

従来のリベット接合によらず、船舶工事や橋梁で用いられていた全溶接工法を採用。これにより鋼材量の節約とともに、ハンチを取らない梁端部の補強（水平ハンチ、端部フランジの板厚増し）が可能になり、天井フトコロの節約→階高の削減・階数の増加（10階）を可能にした。高い精度の要求される柱・梁接合部の溶接作業は、梁モーメントの最も少ない箇所に継手を設け、接合部の溶接作業は工場加工としている。（作業効率の改善が課題）

・ 軽量コンクリートによる耐火被覆

室内の鉄骨柱は、周囲を両面凹型の人造石ブロックで囲って化粧型枠とし、高さ1.8mごとに軽量コンクリート（重量比6割弱）を充填して耐火被覆としている。軽量コンクリートは床スラブの鉄筋コンクリートにも使用されている。（ワーカビリティ不足の解消が課題）

■カーテンウォール

・ 外壁／軽量コンクリートブロックパネル

外壁は、薄い軽量コンクリートブロック（表面：人造石小突仕上）の裏面にグラスウールのブロック（60mm）を貼り付け、鉄骨スタッドにフックボルトで緊結している。重量比は鉄筋コンクリート壁の46%と軽い。（外壁目地とスタッドの位置をずらす工夫が必要）

・ 開口部／アルミサッシュ・アルミスパンドレル

開口部はサッシュ・腰壁（スパンドレル）・枠材すべてをアルミの押し出し材とし、建物の南側・北側のほとんど全面にこのアルミサッシュ・アルミスパンドレルが使用された。スパンドレルの裏面にはグラスウールブロック60mmを貼り付け、保温材としている。アルミサッシュの重量比はスチールサッシュの34%。（高層化に伴う耐風圧への工夫が課題）

■天井の吸音仕上げ材

1階の大営業室、高層階の執務空間はともに大空間のため、天井仕上げには吸音性能・製作寸法精度の高い乾式の工業化材料が必要になる。1階の大営業室には輸入品を参考にして開発された国産品の有効アルミ天井「アコースチックタイル」（現存せず）が使用され、上層階の執務空間には、吸音性能の低い国産品のテックスは使用せず、ジョンスマンヴィル製の吸音テックス「ファイバートン」が使用された。

鉄骨加工精度の向上や現場作業の合理化、工業化製品の品質向上といった、カーテンウォール工法に付随する技術的課題は、旧日本相互銀行本店の野心的な建設過程でその多くが発見された。その意味においても、旧日本相互銀行本店は現在のオフィスビル建築の原点であり、建築史的に極めて重要な価値を有する建物といえる。